

私のイタリア紀行（一）

長谷川 修

一〇月にイタリアへ行ってきた。数年前よりナポリに住む娘から来ないかと誘われており、コロナも収まったので出かけた。今回が最後の欧州旅行になるだろうと、ナポリの九泊に、行きたかったイタリアの街（アッシジ、フィレンツェ、ボローニャ、ヴェネツィア）への国内旅行を挟み、全行程一四泊の旅となった。

今回の楽しみの一つは、ナポリに三作、フィレンツェに五作あるというカラヴァッジヨの絵画を見ることがだった。特に彼が三五歳の時ローマで殺人を犯し、亡くなるまでの三年間ナポリとその周辺（マルタ、シチリア）で逃亡生活を続けながらの作品は、作者の鬼気が迫る。「聖ウルスラの苦悩」と「慈悲の七つの行い」は、暗い背景に光と影が鮮やかに感動を覚えた。

旅行にはゲーテの『イタリア紀行』を携行した。ゲーテはナポリの風景、明るさ、住民の楽観性を称賛し、宗教色の濃いローマより好ましいとする。また、北の人は南の人を怠惰だと非難するが、南は土地・気候に恵まれ、あくせく働かなくても生活ができるのだから何ら問題ないと擁護する。ゲーテがイタリアへ行ったのは一八世紀末であるが、ナポリ人の性向は、今もあまり変わらない。治安を心配し躊躇する娘にナポリの下町を案内させたが、エネルギー溢れる猥雑さと住民の人懐っこさは忘れ難い。

ゲーテの頃と大きく変わったのは、ヴェスヴィオ山である。二三〇年前は常時噴煙を上げ、時々噴火が起きていた。地質学に見識を持つゲーテは地球内部から届く岩石を手に入れようと、一ヶ月余のナポリ滞在中に三度噴火口まで出かけた。現在は火山活動も収まり噴火・噴煙は見られないが、火口は嚴重に監視されている。また、当時ポンペイ遺跡は発見されたばかりでゲーテは詳しく記していないが、その後の大掛りな発掘作業は現在も進行中だ。二千年前の古代人の日常が次々と明かされていることに驚く。

ゲーテ曰く「ナポリを見てから死ねー」と。ナポリを見終えた私はいつ死んでも良い。